繊維のふるさとシリーズ その6

国宝・獅子狩文錦 —シルクロードの回想—

書 上 誠之助

1. ま え が き

獅子狩文錦はわが国の古典織物として最も重要なものの一つである。紋織物なるが故に組織の構成、図柄の内容など歴史的、地理的にまことに興味深い内容が含まれている。紋織の高度な技術によって組立てられる機仕掛から生れた製品はその時代や製造場所まで判定することができる。それはあたかも同じ鑄型から生れた古鏡がその分布により歴史的な事実を発見するのに役立っているようなものである。

図1の(A)は江戸時代に福岡県志賀島(しかのしま)で発見された古代日中関係を知る貴重な物証として有名な「かんのわのなのこくおう」と記した金印である。ところが最近中国で出土した金印(B)はその規格が1辺が後漢初めの一寸(2.347 cm)であり、彫り方から作者も同

一であろうといわれている。このことから(A)は建武中元2年(A. D. 57年)に奴国の朝貢使に光武帝から下賜されたものとされている¹⁾。

これより後代の邪馬台国の決め手となる三角縁神獣鏡より一足早く位置づけができたのである。

獅子狩文錦については龍村平蔵氏がすでに二、三の同一規格と思われる資料により歴史的考証を発表されている²⁾。さらに先代平蔵氏は戦前に獅子狩文錦を復元された。

本稿では筆者も織物の一技術者として若干の資料を加えてこれらの問題に見解を加えてみたいと思う。

2. 獅子狩文錦世に出る

法隆寺の夢殿は聖徳太子を記念して太子が居住していた斑鳩宮跡(いかるがのみやあと)に創立された東院の正堂である³⁾(図2)。

表1に示すように夢殿は天平11年(739年)に創建され当初は八角仏殿といったが平安時代にいつのまにか夢殿と呼ばれるようになった。その名にふさわしい端麗な建物である。この建物は建立以来1200年以上にわたって修理の時以外、開扉は許されなかった。

時代が変わって明治12年政府の依頼により、日本最初の国宝調査官であるフェノロサ⁴⁾は岡倉天心⁵⁾と共にこの扉を開けた。中には中心をなす本尊・観世音菩薩像

図1 二つの金印

(A) 志賀島出土「漢委奴国王」

(B) 昭和56年2月出土の「広陵王」

図2 夢殿(八角仏殿)

A National Treasure.
Brocade of Lion Hunting
SEINOSUKE KAKIAGE
群馬大学名誉教授(工博)

図3 観世音母薩像

が白布に包まれていた。この白布をとると菩薩像が燦然と光を放ってでてきた。この二人はあまりの荘厳な美しさに圧倒され、しばし無言で立っていたという。

図3に示すこの像は救世観音ともいい、高さは197 cm、聖徳太子を象徴したもので国宝になっている。

観音像の近くには行信僧都(そうず)の木像があった。行信は東院建設の功労者である。この像は唐招提寺の鑑真像と共に天平肖像彫刻の双璧として有名で日本最古のものである。これらの像の傍らに一卷の織物がおいてあった。これが本題の獅子狩文錦でこの種の織物の古代裂

図4 獅子狩文錦

としては世界にも類をみない完全なものである。

図4に示すような径45 cmの連珠文がよこに3個ならびたてに5個つらなっている。幅135 cm×長さ250 cmの織物である⁶⁾。

3. 伝来の時期と時代的背景

獅子狩文錦はフェノローサが最初に見たとき、これはササン朝ペルシャ伝来の模様であることを指摘した。このことから獅子狩文錦はシルクロードを通じた東西文化の交流を示した作品ということになる。

この錦は幅は広く完全なものであるが夢殿創設のときすでに折目や摩耗の跡があり、ある目的で使用された形跡がある(図4)。聖徳太子の軍旗という伝説もあるので少なくとも夢殿創設以前100年前後の期間宮中の宝物として保管されていたということはありうることである。

丁度そのころシルクロードの西側ペルシャは有力な君主コスロウⅡ世の時代であり、シリヤからインダス河まで征服した時代である。東端の中国は煬帝(だい)が中国を統一した時代である。そしてその中国のシルクロードにはトルファン(図5)を中心とした高昌国が栄え麴伯雅王の時代である。東の日本には名君聖徳太子が摂政として新しい国造りに活躍していた。これを表1にまとめてみると世は正に歴史上一つのピークを迎えた時代といえよう。

図5 西域要図

ササン朝ペルシャのコスロウⅡ世の銀皿の肖像(図6)は中国にわたり獅子狩文錦の図案となった⁷⁾。ガンダーラ付近で西方からのシルクロードはインドからの仏教のルートと合流した。仏教とヘレニズムの文化との結合は図7の例に見るように仏像の原形となった⁸⁾。

つぎに獅子狩文錦を構成する文様について考証を進め製造された年代や場所について考察してみる。

4. シルクロードと模様の伝播

全体を構成する円形の模様はペルシャ系である。円形

表1 獅子狩文錦到来の時代

500		600		700		800			
				636					
(ペルシャ) ササン王朝(ゾロアスター教)				サラセン帝国(回教)					
590				628					
				←→					
				コスローⅡ世在位					
581				618		(629モハメット アラビヤで勝利)			
(中国) 六朝		隋		唐					
		605		618					
		←→		629-645 玄奘三蔵インドへ					
		煬帝在位							
498		607		小野妹子最初の遣隋使として洛陽へ					
		640							
(中国) 高昌国(トルファン)		602 619							
		←→							
		麹伯雅王在位							
552		645		710					
(日本) 古墳時代		飛鳥時代		白鳳時代		奈良時代		平安時代	
		593 622				739 752			
		←→				美夢殿 天智平 史蹟十 建進一 年		大仏開 眼宝 四年	
欽教明 天皇十三年		607		聖徳太子摂政 最初の法隆寺着工		仏唐との 術交流 起る多 く		万葉集 成る

図6 コスロウII世銀皿・ササン朝

は太陽を崇拝する原始紋様から出発するといわれる。連珠紋もペルシャ系である。大きい円の間隙を埋めたアカンサス十字唐草はギリシャ系の模様であって、図8に示されるように11世紀のビザンチンの時代にも存続されている⁹⁾。この図に見られる翼のある馬はペガサスでギリシャ神話の天馬であり、獅子狩文錦の馬でもある。

この原形は図9¹⁰⁾によりさらにくわしく観察することができる。図4の天馬の翼と比較してみよう。

図7 鬼子母神像(ヘレニズムの影響)

図8 動物文様錦(絹)
ビザンチン11 C. (Cooper Union Museum, N. Y.)

図9 天馬, 発掘織物断片
イラン6-7世紀リヨン織物博物館

根もとの亀甲模様、つづく連珠紋、さらに先端の羽、その数、全く同じであることがわかる。

正しく図4は、図9がオリジナルとしてとり入れられていることが認められる。さらに馬の尻の円形は、中国で図案化するとき、文字を入れてみようとするのは、自然なことであつたろうと思われる。

樹入りの連珠紋も西方のパターンであるが、クチャ(庫車)出土の舍利容器の蓋にも見ることができる(図10)。

ここにも西方文化と仏教との出合を見ることができる¹¹⁾。

騎馬の狩獵図はペルシャ、中国に見られる。狩獵は若鹿の角をとるための実用的なものから次第に儀礼的なものになったようである。さらに獅子と組合せて王の權威を示すシンボルマークとなったのである。

図10 舍利容器の蓋・クチャ出土

ここで注目されるのは獅子狩文錦の騎主の王冠が図6のコスロウⅡ世のそれと全く一致することである。これは西の英雄をシンボライズしたものでこの錦はペルシャ製の線が出てくる。しかしこの錦は絹製なので当時ペルシャ方面にはまだ絹がなかったので、中国製という説もあるが図24などにみられるように当時すでに絹は西方に分布していたようである。しかも当時コスロウⅡ世はアレキサンドリアのクテシオンに織物工場も建設し、ペルシャには高度の紋織技術があったことは当時の織物から推察される。

中国製造説に有力な決め手となるのは馬体にある山と吉の文字である^{2, 19)}。この文字の自然な図案化は遠い異国ペルシャの筆法では不可能であろう。また馬の脚、特にひづめの型を大きくしてあるのは中国の漢以来の筆法で彫刻にも見られる¹²⁾(図11)。中近東の図案の馬は図24のように自然の姿態を現わしているようである。

さらに獅子狩文錦の円形の間隙を埋めるアカンサス十字唐草模様(図12)について東西の関連を述べる。

アカンサス(Acanths)は地中海沿岸原野の野草で、葉は薊の葉を大きくしたような形で、古代ギリシャ・ローマで装飾モチーフとしてよく用いられた¹⁸⁾。建築ではコリント式柱頭の浮彫装飾には必ずアカンサスの葉がつく。

図11 銅奔馬ブロンズ・後漢時代
甘肅省博物館

家具や衣服や壺では、建築よりもモチーフは様式化される。これはパルメット唐草ともいわれる。パルメット (Palmette) はわが国では一般に忍冬(どう)文という¹⁸⁾。忍冬はスイカズラのことである。パルメットは本来パルムすなわち棕櫚を主題とした棕櫚の葉文様で掌形のことであって勝利の象徴である。この模様は B. C. 4～5 世紀頃メソポタミア、エジプトなどで流行し、さらに中国、インドに伝えられた。

図 12 アカサス十字唐草・
パルメット唐草(忍冬)

(a) 長杯の縁飾り・ササン朝

(b) 舍利容器・クチャ出土

図 13 パルメット唐草・忍冬

図 14 獅子狩文錦と同柄のパルメット唐草(忍冬)
観音菩薩像光背(部分)

ササン朝のパルメット唐草が舍利容器に応用され中国に入ったことを図 13 に示した¹⁴⁾。

獅子狩文錦のパルメット唐草の一部がそのままの形で同じ夢殿にあった観音像の光背に見られるのも興味深い(図 14)⁹⁾。

5. 類型織物からの考察

獅子狩文錦の製作地と年代について、当時の日本にはまだこれだけの技術はなかったので、概ね中国伝来と考えられる。そしてこれを裏付ける中国産と思われる類型の織物が、2～3 存在するのである。特に大谷探検隊(1912)がトルファンのアスターナ墓地から発掘した、図 15 に示したものは花樹対鹿文錦といい、ミイラの顔覆いとなっていたものである。布片は獅子狩文錦と類似しており龍村平蔵氏が対比研究されたがその要旨は次の通りである²⁾。

- 1) 屏風仕立てであり、よこ錦である。よこ糸は 5 丁で天然染料の 5 色の色が一致している。
- 2) 模様に対する配色が一致している。4 色は通しで用い、1 色は切り変えである。
- 3) 地組織は片流れ三枚綾地で、たてよこ糸の密度比が等しい。
- 4) 1 釜の糸数は獅子狩紋(664ノ口)、対鹿文錦(440ノ口)で 2/3 と変換の可能性がある。
- 5) 樹木、動物、アカサス十字文、漢字、連珠紋など両者に対称的である。

スタインがアスターナ(1914 年大正 3 年)から発掘したもの(図 16)は鹿の角の部分から察するとこれも対鹿文錦と同じ範ちゅうのものであることがわかる。これはインドのニューデリー博物館にあるがロンドンの大英博物館などにも同類のものが所蔵されている。スタインはハンガリー生れであるが後に英国籍を得た人で 1943 年

図 15 花樹対鹿文錦・大谷探検隊・龍谷大学蔵

図 16 連珠鹿文錦断片

アスター出土(スタインによる)ニューデリー博物館

図 17 茶地犀連珠文錦・正倉院蔵

探検の途次アフガニスタンで 82 才の生涯を終った¹⁵⁾。

図 17 は正倉製の犀連珠文錦である。別の関連裂地には犀の頭部があるが、その構成からこれも獅子狩文錦と同時代、同類の織物であることが観察される¹¹⁾。

以上のことを総合しさらに年代をつめてゆくと獅子狩文錦の生れた土地と時期は次のようにしぼられてくる。

1) アスターナ出土の錦綾はその墓誌銘より 548～672 の間のものである。大谷探検隊のミイラの顔覆いは墓誌銘より 620～628 となっている。従って製作年代はそれ以前と考えられる。

2) 高昌国の麴伯雅は高麗遠征(612)の帰途、故郷への土産に洛陽や長安(現在の西安)により多量の貴重な布を持ち帰ったと考えられる。

3) 607, 609 年には小野妹子が遣隋使として 2 回洛陽を訪れている。この土産として日本に持ち帰った可能性もある。

4) 西の雄コスロウⅡ世の在位は 590～628 であるから、この図案化した作品はこれとあまり遠くない時代であろう。

これらのことを表 1 で見ると獅子狩文錦のできた年代は 600 年代の初期、隋の終りか唐の初めとみて間違いないであろう。

ササン朝ペルシャは 636 年に滅んでしまい、その文化

は次のサラセン帝国(回教)によって破壊されてしまうのである。

シルクロードの中心、高昌国も同時代に滅びてしまう。獅子狩文錦は東西の英雄の揃った、歴史の上から一つのピークの時代ともいふべき時に生れたといえることができる。

6. たて錦とよこ錦

古代人は織物をまず平織で完成したとき、つぎになんとかして模様をつけたいと考えたであろう。たて糸は各種の装置を工夫してまずセットしてしまうから、後から挿入するよこ糸で模様を現わそうというのは自然のことであろう。

西方の国では羊毛は古くから使われていたので、まず丈夫な麻糸をあらくセットしておき、太い羊毛の染糸で織付ながら模様を現わしていった。これはメソポタミア地方の出土品にも見られるし、やがてコプト織としてエジプト地方に開化し、さらにフランスではゴブラン織としてルーブル美術館にある名作を残した。わが国では西陣などの綴織として巧緻な伝統的技法が伝わっている。

図 18 は楼蘭出土の毛綴織である。たて糸は強い燃の入った麻糸である。模様の形式からペルシャ方面からの移入品ではないかと思われる¹⁶⁾。

中国においても殷、周の時代の錦はごく単純なよこ錦と考えられる。その後量産するために漢から隋にかけてたて錦を織りだした。これは中国で絹を産し細いたて糸の製造が可能になったためと思われる。

図 19 は漢時代のたて錦で⁹⁾、表面はたて、よこ一本ずつ交差しているが構成はたて、よこそれぞれ裏糸を配した複雑な組織であり、高度な技術の水準を示している。

図 20 はスタインによる楼蘭出土のたて錦である。「高ク登リテ四海ヲ望ム」という瑞祥句が織り出してある¹⁶⁾。

獅子狩文錦の生れた隋から唐にかけて西方ペルシャでは綴織より発展して紋織物はよこ錦として高度な技術が

図 18 毛綴織断片

楼蘭出土(スタインによる)

図 19 たて錦(絹)漢, 1 B.C.
Philadelphia Musium

図 20 たて錦断片
楼蘭出土(スタインによる)

発達していた。よこ錦の方が紋の機仕掛が簡単にすみ、色数、模様の大さは比較的自由であるから紋織として合理的といえるであろう。

この技術がシルクロードを通じて中国へ多数入りこんだのであるから中国の織物は相当この影響を受けたものと思われる。隋から唐にかけて中国の織物はたて錦とよこ錦が交ざってくるのはこのためであろう。

やがて綾地を基礎とする本来の錦は確立され、朱子地の開発と合わせて珠珍などよこ糸で模様を現わすことが紋織の主力となるのである。

わが国の大和錦といわれるものは当初からよこ錦である。獅子狩文錦は当時の西方の影響を受けたよこ錦である。中国古来のたて錦の高度の技術と結びついてよこ錦の完成された美しさを創りだしている。

獅子狩文錦は前述の通りたて 1 色、よこ 5 色のよこ錦であり、先代龍村平蔵氏はこれを忠実に復元したのである。

最近、新井実氏¹⁶⁾はコンピューターの技術を使い複雑なたて錦の技術を合理化して獅子狩文錦の復元を完成した。これはたて 3 色、よこ 4 色(うち 1 色は特別なさし

図 21 獅子狩文錦復元・たてよこ錦

図 22 獅子狩文錦復元部分・たてよこ錦

図 23 獅子狩文錦・コンピューター用組織図

よこ)のたて・よこ錦というべきもので一段と深みのある風合である。シルクロードの錦は今なお織物技術者の情熱の中に生きているといえるであろう。

図 21 はその完成した 1 釜の紋様であり、図 22 は一部の拡大図である。図 23 はコンピューター用組織図である。

7. 日本にもアマゾン族

紋織物が一つの機仕掛(はたじかけ)ができると相似た製品ができ、その産地や生産時期が同一であることを示

図24 アマゾン族文様錦(絹)
6~7C, シリヤかエジプト(Havard Univ.)

図25 かもしか文様錦(絹)
6~7C, シリヤかエジプト(Cleveland museum)

すことはすでに述べてきたところである。このことについてさらに2, 3の例を述べよう。

図24と図25は現在異なった場所に所蔵されているが、模様構成から同種類の紋織物であることがわかる⁹⁾。円形がくずれているのはたて、よこ糸の密度に変動があるためである。図25はやさしいかもしかの母子の図であるが図24はアマゾン族の文様である。アマゾン族とはギリシャ神話の伝説的女武人族である。女だけで国をなし、1人の女王により治められる。一定の時期に他国の男子により子種を得て女のみ育てる。男は不具にするか殺す。女の子は幼いうちに右の乳房を切りとる。弓を引くため又、槍を投げるためである。このため「乳なし族」の名がある。

ブラジルにもこれに似た伝説があり、今日のアマゾナス州やアマゾン川の名ができたといわれている。

この模様は古代ギリシャの服装であり2色からなっている。ところがこの原本になる多色のオリジナルが現在保存されている。これはライン川の上流にあるゼッキンゲン寺院にあった、聖フリドリンの覆いで、6世紀の終りにこの教会に葬られ、墓は19世紀になって開かれた

ものである。この布はこまかく切られ今はベルリンとチューリッヒのコレクションとして保存されている。

このコレクションは図24のように帽子はなく何もつけていない。ところが法隆寺の錦の中にこの無帽のアマゾン族に似た錦がある¹¹⁾(図26)。これをアマゾン族と断定するのは筆者の速断であろうか。

図27は正倉院の宝物¹⁷⁾で図26に対比させられてい

図26 緑地狩猟文錦・法隆寺

図27 緑地狩猟文錦・正倉院宝物

図28 ササン朝・アナヒータ女神を飾る
銀製水瓶(部分)
東京・出光美術館

る。両者は獅子狩文錦より後期のもので模様がソフトに変化した時代のものであるという説がある。しかしこれはむしろ獅子狩文錦以前のもので中国的要素はみられず豹やぶどうをモチーフとするペルシャ以西のものが日本に伝来したのではなからうか。ここでは豹が多くとり上げられ図26、27もその例である。図24では豹が美人にはとてもかなわぬと尻尾をまいているあたりユーモラスなところがある。この豹は次第に図26、27のように攻撃的になりさらに獅子狩文錦のように獅子となり勇将狩猟のシンボルとなっていったのではなからうか。

図26、27のササン朝特有の連珠紋の外にあるぶどうの葉と実をつないだ唐草模様は図28に示すようにササン朝の水瓶にも見られる西方の特色を示している¹⁴⁾。

8. 夢殿と砂漠の錦

獅子狩文錦は夢殿に秘宝として保存された。一方アスターナの貴人の墓地からは大谷探検隊やスタインらの探検家により同種類と思われる錦が発掘された。アスターナはウィグル語で「憩い」あるいは「眠り」の意であり、現在の地名は二堡である。これらの錦は計らずも夢殿と憩いと同じような名のところにあったが両者の会った歴史的な運命は甚だしい相違があった。

獅子狩文錦のあった法隆寺は一度戦禍に見舞われたが幸いに東院夢殿は残った。何度か改修を重ねつつ平穏な今日を迎えている。春には砂嵐ならぬ花吹雪の舞う中に1200有余年その罪は固く閉ざされたままであった。

獅子狩文錦の主役コスロウⅡ世は628年に殺されペルシャは回教の世界に変わる。隋の暴君煬帝(だい)は618年に部下に殺された。獅子狩文錦はこの煬帝が当時遣隋使として渡った小野妹子に贈ったものかもしれないのである。

アスターナのあるトルファン地方は高昌国として当時中国のシルクロードの西の門戸として栄えたが640年には唐に滅されてしまう。行き交う車馬のひずめの音が消え去ると砂嵐が自然の猛威をふるう。海面下300mにあるトルファン盆地は吹きつける砂嵐により変ぼうしてしまう。そして高昌国の文化は砂漠の中に埋れてしまうのである¹⁸⁾。

図29はスタインが訪れた楼蘭遺蹟¹⁶⁾であるがアスターナ墓地もこれに似た地の果てともいふべき様相を呈している。

あまりにもそれぞれ違った錦たちの運命ではある。これもシルクロードのロマンともいふべきものであろう。

図29 楼蘭遺蹟の破壊されたストウパ
スタイン撮影(1914)

獅子狩文錦と同類の織物が当時の中心地西安や洛陽から出土するならば獅子狩文錦の時代的考証はさらに明確なものとなるであろう。

文 献

- 1) 岡崎 敬, 昭和56年7月10日号, 毎日新聞
- 2) 龍村平蔵, 錦とボロの話, 1967, 学生社
- 3) 毎日新聞社, 原色版国宝, 昭51
- 4) フェノローサ, アメリカの哲学者, 美術研究家, 明治11年来日
- 5) 岡倉天心, 横浜の人, 東京美術学校長
- 6) 林 良一, シルクロードと正倉院, 日本の美術6巻, 1979, 平凡社
- 7) 日本放送協会, 新日新聞社, 大ペルシャ文明展案内書, 1977
- 8) 長沢和俊, 敦煌・シルクロード(毎日グラフ別冊), 昭52, 毎日新聞社
- 9) A.C. Weibel, Two Thousand Years of Textiles, 1972, Hacker Art Books (N.Y.)
- 10) LE MUSEE HISTORIQUE DES TISSUS DE LYON 1977
- 11) 山辺知行構成, 正倉院裂名物裂, 1977, 平凡社
- 12) 読売新聞社, 中華人民共和国シルクロード文物展案内書, 1979
- 13) 染色大辞典, 昭52, 淡交社
- 14) 林 良一, シルクロードと正倉院(日本の美術6巻), 1979, 平凡社
- 15) 山辺知行, シルクロードの染色, 昭54, 紫紅社
- 16) 新井 実, 桐生市境野町, 新伊織物(株)
- 17) 渡辺ひろし篇, 未来への遺産, 第3集, 昭52, 学習研究社
- 18) 司馬遼太郎, シルクロード, 6巻, 1981, 日本放送協会
- 19) 藤井守一, 世界の染色, 第16号, 昭52, 染色と生活社
- 20) 久野・鈴木, 法隆寺, 昭41, 小学館

(昭和57年1月26日受理)